大峰山系、東に大台ヶ原をはじめとする台高山系、西に伯母子（おばこ）山地があり、山岳地帯となっています。近畿地方以西の本州ではこの地域のみにしかない、いわゆる亜高山帯針葉樹林のシラビソ林、トウヒ林が見られ、その下部に夏緑樹林のブナ林が残されています。夏緑樹林と照葉樹林を分ける平均的な標高1,000mラインの上部と下部では、相観が著しく異なります。上部ではウラジロモミ、オオイタヤメイゲツ、サワグルミ、ムシカリ、ナナカマド、アケボノツツジ、シロヤシオやタンナサワフタギなど、下部ではモミ、シイやカシ類などの常緑樹、イロハモミジ、モチツツジやサワフタギなどが見られ、林内に生育する草本もこのラインを境にして違ってきます。

紀伊山地は地形が急峻で渓谷が発達しており、渓流沿いには特徴的な植物が多く見られます。サツキ、ユキヤナギ、アワモリショウマやヤシャゼンマイに代表される渓流沿い植物には、紀伊半島南部の固有種であるホソバノギク、カワゼンゴやミギワトダシバなど、個体数が少ない種も存在します。そのほかにも、シダ植物ではヒメスギラン、スギラン、ヒモラン、ヒモカズラ、ヤマクラマゴケ、ナカミシシラン、ヒメイノモトソウ、ヒロハアツイタ、オオミネイワヘゴ、アミシダ、キレハオオクボシダ、オオクボシダ、裸子植物ではシラビソ、トウヒ、バラモミ、コウヤマキ、トガサワラ、イチイ、双子葉植物ではゴゼンタチバナ、ツガザクラ、コケモモ、ミヤマダイコンソウ、オオミネコザクラ、ヒメイチゲ、レンゲショウマ、オガラバナ、ダケカンバ、ネコシデ、オオヤマレンゲ、キレンゲショウマ、イワザクラ、コモノギク、コウスユキソウ、ヒメイワカガミ、キイセンニンソウ、ズイナ、ハガクレツリフネ、センダイソウ、単子葉植物ではケイビラン、キイジョウロウホトトギス、チャボシライトソウ、ウラハグサ、チャボホトトギス、サルメンエビネ、フガクスズムシソウ、ヒナチドリ、ウチョウランなど、他地域には見られない種が多く存在するという点で本地域は特徴的です。

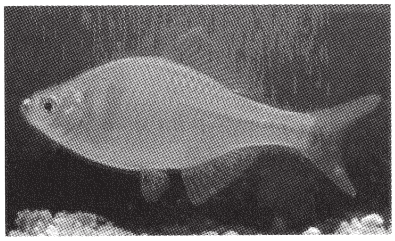
特定希少野生動植物　vol.1

ニッポンバラタナゴ（魚類コイ目コイ科）

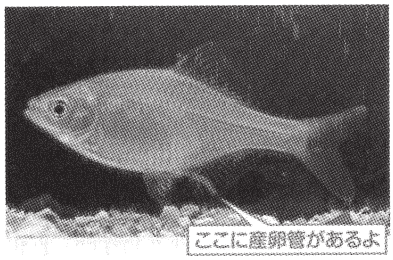
全長およそ5cmで、ほかのタナゴに比べてタテ長の淡水魚。日本だけに生息していて、繁殖の時期にオスがバラ色になるから、こう呼ばれているんだ。ドブガイなどの二枚貝に卵を産むので、二枚貝なしでは生きていけないんだよ。

かつては、西日本のため池などに広く住んでいたんだけど、外国から持ち込まれた近縁の魚と混ざり合って雑種になったり、ブラックバスなどの外来魚に食べられたりして、絶滅寸前になってしまった…。

大阪府東部、香川県北部、九州北中部のみに生息していると言われていたけれど、最近、奈良公園内のあるひとつの“ため池”にすんでいることが確認されたんだ。現在、ため池の所有者や近畿大学の協力で、調査や守っていくための活動をしているよ。



オス（バラ色の体色）



メス（産卵のための管が伸びている。この管で二枚貝のなかに卵を産みつける。）

県民だより奈良（平成22年5月号）より

特定希少野生動植物　vol.2

カツラギグミ（種子植物グミ科）

奈良県の大和葛城山で発見されたので、カツラギグミというんだ。2mほどの落葉低木。葉は楕円状の卵形で、先端は尾状にとがり、両面に星状毛（細かい毛）があるけど、ほかのグミと違って葉の裏には鱗片（うろこ状のもの）がほとんどないよ。4月下旬から5月上旬に開花。果実は広楕円形で長さ1cm程度、6月下旬に赤く熟し、渋みが少なくて甘いから小鳥が食べてるみたい。人の手が入った里山の環境が生育に適しているんだ。

もともと少なくて、大和高原の一部や大和葛城山などで生育し、全体でも数十株しか確認されていないんだ。

大和高原の自生地では、天理市や地元の人たちが協力して保全活動をしているよ。

緑を帯びた乳白色の花

赤く熟した果実

県民だより奈良（平成22年7月号）より

特定希少野生動植物　vol.3

キレンゲショウマ（種子植物ユキノシタ科）

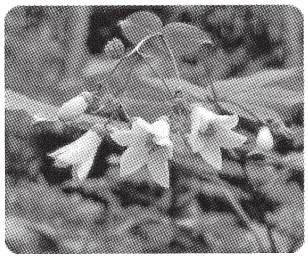
キレンゲショウマ属はこの１種だけなんだ。日本で最初に発表された属で、学名が和名だよ。

高さが１ｍにもなる大型の多年草。７月から８月に開花。葉は、手のひらのように浅く切れ込みがあり、下部の葉には長い葉柄があるよ。

産地が冷温帯の石灰岩地に限られていて、水はけがよく岩れきが多い落葉樹林内に生育。南九州・四国・紀伊半島の奥山にまれに生育し、「ソハヤキ要素」の種の一つと考えられているよ。

花が美しいので山草業者や愛好家に採取されたり、ニホンジカの食害を受けたりして、激減してしまったんだ。

葉は10cmくらいの大きさ



淡黄色でラッパ状のやや大きな花

県民だより奈良（平成22年８月号）より

特定希少野生動植物　vol.4

カワゼンゴ（種子植物セリ科）

「川前胡（カワゼンゴ）」という名前は、中国の「前胡（ゼンゴ）」という薬草に似ていて川岸に生えるところから名づけられたんだ。

川岸の岩の割れ目に根を下ろし、大雨で川の水が増えても流されないようしっかり岩にしがみついている。なぜかこんなに厳しい環境に生育しているよ。しかも、生える場所の大変限られた植物で、主に紀伊半島南部の奈良・三重・和歌山の３県にまたがる瀞八丁（どろはっちょう）付近の北山川の川岸で見られるよ。

８月頃から大きくなり、１ｍほどになって秋には花が咲くんだ。だけど、近頃増えたニホンジカに食べられてしまうので、花が咲くまで育たず数が減ったんだ。ニホンジカが増えた理由は、降雪量の減少により越冬が容易になったことや狩猟者の減少などがあるんだよ。

秋に白い小さな花が、傘のほねのように放射状に出た柄の先にかたまって咲く。

やや湿った岩の割れ目の、増水時には流水に洗われる環境に生育。

県民だより奈良（平成22年９月号）より

特定希少野生動植物　vol.5

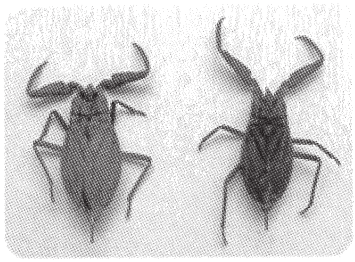
ヒメタイコウチ（昆虫類カメムシ目タイコウチ科）

ヒメタイコウチは、前足でダンゴムシなどを捕まえて体液を吸う肉食の水生昆虫なんだ。タイコウチの仲間では小型で、小さい意味を表す「ヒメ」が名前につけられているよ。呼吸管がタイコウチに比べて短いので水深が深いと溺（おぼ）れ、翅（はね）があるのに飛べない不思議な昆虫だよ。

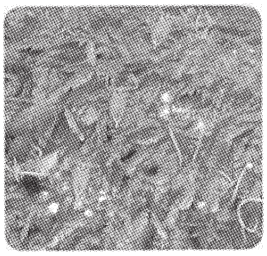
湧き水のある浅い湿地や休耕田に生息していて、分布域が非常に狭く、個体数も少ないんだ。最近、開発や湧き水の枯渇により減少し、さらに環境が悪化すれば絶滅するかもしれないんだよ。

静岡県から兵庫県にかけての本州と四国の香川県に生息していて、紀伊半島では和歌山・三重両県で生息が報告されていたんだ。奈良県では最近の工事に伴う環境調査によって、五條市と大淀町で初めて発見されたんだよ。

その後、保護のためヒメタイコウチが生きていける環境がつくられ、平成21年2月に「五條のヒメタイコウチを守る会」が結成されて保護活動をしているよ。



体長2cmほどで、体色はにぶい光沢の暗褐色。おしりの3mmぐらいの管から呼吸する。（右がオス 左がメス）



コケの間に産んだ卵から幼虫が生まれているところ。

県民だより奈良（平成23年1月号）より